

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34404

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13076

研究課題名(和文) 中世天台寺院における児灌頂儀礼の生成と流伝に関する研究

研究課題名(英文) the study of Chigo Kanjo's

研究代表者

辻 晶子 (Tsuji, Shoko)

大阪経済大学・経営学部・講師

研究者番号：40825428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：新型コロナウイルス感染拡大の影響により、児灌頂伝本の書写活動の場となった関東の天台寺院の本格的な資料調査はできなかったが、立教大学付属図書館において、近代の書写者の一人である岩田準一の手になる写本の確認や、稲敷市歴史民俗資料館との情報共有によって、児灌頂伝本の伝流に大きく関与したと考えられる学僧・尊栄の追跡調査ができた。このほか児灌頂の背景に広がる中世の言説「赤白二滴(さんずいに帝)」と禅との融合を考察し「『体内口決』に関する覚書 附翻刻」(奈良女子大学『叙説』47巻2020年3月)を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児灌頂は、中世の天台寺院で稚児を対象に行われたと伝えられる密教儀礼であるが、その実態は長らく一般に知られることなく、今東光の小説「稚児」を通して、時に誤解をも含んで語られてきた。そこで本研究では、児灌頂伝本の一次資料による基礎研究を進め、児灌頂の構造と流伝の実態を明らかにし、従来、言及されることなかった児灌頂の新たな面を提示した。

研究成果の概要(英文)：I confirmed Chigo Kinjo's manuscript by modern copyist of Chigo Kanjo Iwata Junitsi (1900-1945) & investigated medieval learned monk Sonei. Moreover, I considered fusion of medieval discourse "Shaku-byaku-Nitai" and Zen, & published a dissertation "A note about Tainai-Kuketsu" ("Josetsu" no.47, 2020).

Summarizing these results, I published "Studies of Chigo Kanjo" (Hozokan, 2021)/

研究分野：中世文学

キーワード：児灌頂

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である児灌頂は、中世の天台寺院で稚児を対象にして行われたと伝えられる密教儀礼である。その教義と実践の次第は、教団内で師から弟子への師資相承によってのみ伝授されたものであり、また、儀礼そのものが江戸期以前に途絶えたことから、長らくその存在は一般に知られることがなかった。ところが、昭和期になって天台僧侶であった作家・今東光によって小説「稚児」の題材として発表されたことにより、一躍、注目を集め、以降、一部に好事家のともいうべき好奇の視線にさらされてきた。それは、児灌頂が未知の儀礼であったこともさることながら、小説「稚児」がそれを稚児と僧との性的な「秘儀」として描いたためでもあったろう。

研究史においては、1980年代以降の文学研究の中で焦点が当てられるようになり、阿部泰郎、田中貴子、松岡心平ら中世文学の気鋭の論者により、ジェンダー論や即位法門などとの関わりを中心に積極的な論究が進められた。しかしながら、当時は資料のアクセスに制限があり、儀礼の一側面の紹介にとどまった感がある。特に、文学研究の根幹となる諸本研究は十分とは言えなかった。2000年代以降になると、一般書やインターネット上において、児灌頂はフィクションである小説「稚児」を通して語られるようになり、儀礼の本質から逸れて、ことさらに性的な要素のみが切り取って拡大解釈されるという事態に陥っていった。

このような状況の中、報告者は、約10年の歳月をかけて、全国に散在する伝本の整理・分析をはじめとする基礎研究により、児灌頂の構造を明らかにすべく論考を発表してきた。その結果、伝本の類別と系統推定を行い、本文の近似性と、筆写者である談義所の学僧の人的ネットワークとが重なり合うことを証明した。また、小説「稚児」について、児灌頂伝本の「異本」に位置づけられる『弘児聖教秘伝私』を近代小説として脚色したものであり、中心的な児灌頂伝本との間にはずれが見られることを指摘した。さらに、伝本の一つ『櫛口伝事』を分析し、児灌頂に、稚児の髪を梳ることで山王権現を降臨させるという作法があったことを解き明かした。

これらの成果は、従来の研究では言及されることのなかった、児灌頂の新たな面の提示であり、基礎研究を確実に前進させるものであったと言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自身の研究をさらに発展させるものとして、談義所での児灌頂伝本の書写活動により焦点を当て、書写者、伝持者としての学僧を追跡調査することで、従来、不明であった児灌頂の生成と流伝の実態を解き明かすことである。これは、近年、中世文学研究分野において、緻密な論究が積み重ねられている談義所の諸問題を、より実態に則して考察することを企図するものでもある。

また、児灌頂伝本の生成の場として推定される世良田山長楽寺(群馬県太田市。天台宗)三十三世住持白翁守明が禅密兼修の僧であったことから、天台密教と禅の融合に着目し、児灌頂の根本である「阿字観」(阿字を觀想すること)と禅思想の関連性を考究することをも目指した。その過程において、児灌頂の背景となる寺院をはじめとした中世社会の動きを捉えるために、当時の資料に頻出する「赤白二滴(正しくは、さんずいに帝)」という、胎生論にかかわる語に着目するようになった。「阿字観」について記す資料のなかに「赤白二滴」の語が散見されたためである。従来、児灌頂をはじめ中世寺院における性にまつわる言説は、真言宗の立川流を筆頭に、教義の極端な一側面として、時に排除の理論をもって語られる傾向にあったが、近年では、小川豊生、伊藤聡らの中世文学・中世思想史研究によって、文献における「赤白二滴」の広がりや鑑みて、性にまるわる言説の教義化はむしろ中世の全体的傾向であることが解き明かされている。本研究においても、児灌頂を、特異な異端的教義としてではなく、「赤白二滴」という中世の潮流のなかになかば自然として発生した可能性を探ることを追加の目的とした。これらの研究により、児灌頂をとおして中世の寺院社会のありかたそのものを考究することを目指した。

3. 研究の方法

申請時には、児灌頂伝本の奥書に記された、関東地方の談義所である長楽寺(群馬県太田市)、月山寺(茨城県桜川市)、千妙寺(茨城県筑西市)、不動院(茨城県稲敷市)また、その周囲に位置する談義所寺院である逢善寺(茨城県稲敷市)、宗光寺(栃木県真岡市)、大光普照寺(埼玉県児玉郡)などについて、聖教類調査の確認と、許可が得られれば一次資料を用いた調査により児灌頂伝本に記された学僧の追跡を行うことを計画していた。研究開始直後には、これらの寺院を実際に訪れ交通手段などを確認し、調査に備えている。

ところが、補助事業期間1年目に発生した新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、各寺院を訪問しての現地調査が容易には実現できなくなってしまった。そのため、当面の間の代替措置として、既に刊行されている書籍により分析を行うこととした。談義所寺院のあった各県史や市町村史などの地域資料や、『昭和現存天台書籍総合目録』をはじめ既に聖教類調査が行われている寺院については寺院目録や資料集、また、『中世禅籍叢刊』全12巻別巻1巻、『真福寺善本叢書』第1期、第2期各12巻などの影印・翻刻資料を収集し、学僧の学問の軌跡の追跡を行うこととした。また、コロナ禍以前に閲覧の叶った正教蔵文庫(大津市西教寺)の資料のうち、「赤白二

滴」にまつわる資料の翻刻作業を進めることとした。

補助事業期間は当初2年間の予定であったが、コロナ禍の影響を受け2年延長した。

4. 研究成果

2019年度は、まず、資料調査の準備として関東の談義所寺院や地域の資料館を訪問し、交通手段や地域の歴史・文化などを確認した。また、立教大学付属図書館を訪問し、鳥羽出身の在野の民俗学者・岩田準一(1900~1945)が書写した、児灌頂伝本の一種『弘児聖教秘伝私』を含む日本の男色文献の調査、撮影を行った。その結果、岩田準一は、今東光と同時期に『弘児聖教秘伝』に着目はしていたが、それはあくまでも男色文献の一種としてのことであり、儀礼としての児灌頂の存在に気づいていた形跡を確かめることができないことを確認した。このとき、談義所として知られる天王寺(東京都台東区)を訪問し、所蔵する室町期の児灌頂伝本『児灌頂口決相承』についても撮影の許可を得たが、その時点では原本を確認することができず、撮影が叶わなかった。その後は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて寺院調査が不可能となったため、刊行された資料を精査することで児灌頂伝本に記された学僧の追跡調査を行った。また、その過程で、児灌頂の生成に長楽寺第三十三世白翁守明の存在を確信し、彼が禅密兼修の僧であったことから、児灌頂を含む天台密教と禅との融合について考察し、その結果を論考『体内口決』に関する覚書 附翻刻』(奈良女子大学『叙説』47巻2020年3月)に発表した。なお、報告者は、本補助事業(若手研究)期間と同時期に、同じく児灌頂をテーマとする科学研究費助成事業(科研費)研究成果公開促進費(19HP5033)の交付を受けたが、公開に関して急遽、資料所蔵者との間に調整の必要が生じたため、研究成果公開促進費の補助機関を1年間延長した。刊行に至るまでの間に、あらためて児灌頂の追加調査・確認作業を行った結果については、研究成果公開促進費の成果である著書『児灌頂の研究 犯と聖性』(法蔵館、2021年)に追記することができた。同書は、2022年に第4回説話文学学会賞を受賞している。

2020年度は、実地調査の機会を探したが、引き続きコロナ禍の影響で実施が叶わなかった。また、近江の著明な談義所として知られる成菩提院(滋賀県米原市。柏原談義所)が所蔵する児灌頂伝本『児灌頂式』について、専門業者による撮影の許可を得、打ち合わせを重ねたが、コロナ禍の最中という事情に鑑みて、直前に撮影を断念することとなった。このような事情により、2020年度も、入手できる刊行物による文献調査を主として談義所寺院や学僧の追跡調査を継続して行った。このほか、「赤白二滴」について記す西教寺正教蔵『神祇灌頂箱陰大事』や同蔵『秘伝鈔』の翻刻作業を行った。実地調査の機会をうかがうため、補助機関を延長することとした。

ところが、2021年度もコロナ禍の影響は依然強く、実地調査は実行できなかった。そこで、『中世禅籍叢刊』、『真福寺善本叢書』を入手し、児灌頂と類似する儀礼について記す資料の存在を調査した。その結果、真言系統の中世資料の中にも童子を対象とした密教儀礼があったことを認めた。これらについては、さらに調査を進めて解明と公開を急ぎたい。このほか、稲敷市立歴史民俗資料館を訪問し、同市江戸崎に所在した談義所である不動院に関する特別展「常州江戸崎不動院 天海ここに顕現す」を閲覧し、展示された不動院所蔵「不動院記録」のなかに、不動院第六世として尊栄の名を確認することができた。尊栄は、月山寺二世として名高い学僧と同名である。月山寺の尊栄は、児灌頂伝本(叡山文庫天海蔵『児灌頂私』)に書写者としての名が見える。報告者は、尊栄が児灌頂伝本の伝播に大きく関与した可能性のあることを前掲著書の中で指摘してきた。加えて、江戸崎不動院は、叡山文庫真如蔵『児灌頂私記』の書写の場でもあった。以上のように、児灌頂の書写者・尊栄をめぐる、月山寺、不動院の関係の密度を確認することができた。

また、本研究の主目的からは逸れるが、2021年度は、児灌頂伝本の近代の書写者としての岩田準一の功績に光を当てる研究を重ねた。不幸にも2021年10月に、三重県鳥羽市にある岩田準一の生家(江戸川乱歩館として公開)が火災に見舞われたため、報告者は焼け残った資料の復旧作業のため約二ヶ月間、週に一度のペースで鳥羽を訪れ、教育委員会や商工会、江戸川乱歩研究者らと協力して資料保存や目録作りに従事した。これらの作業において、岩田が児灌頂伝本を書写した頃の資料に行き当たることはできなかったが、従来、学術界においてほとんど研究されてこなかった岩田準一について、資料保存に貢献できたことは意義深い。岩田については、南方熊楠研究者2名とともに2022年3月に「岩田準一資料研究会」を立ち上げ、資料翻字作業により、黎明期民俗学界における岩田の男色研究の位相を調査している。これらを通して、児灌頂伝本が、儀礼の途絶えた近代にどのように享受されていったかという問題を引き続き考究したい。

2022年度は、科研補助事業の最終年度として実地踏査の機会を探したが、コロナ禍が完全には終息しない中で、高齢者の来訪の多い寺院に出向くことは大いに憚られ、ついに実現させることができなかった。そこで、稲敷市立歴史民俗資料館を再訪し、茨城県の談義所寺院の資料調査の動向について情報収集を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 辻晶子	4. 巻 47
2. 論文標題 『体内口決』に関する覚書 附翻刻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 107-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------